

歴史民俗資料館

令和元年度第3回企画展示 『描かれた町と村』より

歴史民俗資料館では、市民の皆様からお預かりした貴重な資料をたくさん保管しています。それらの資料は、常設展示に加えて、テーマを定めた企画展示を開催し、広く公開しています。

企画展示『描かれた町と村』は2月16日から開催していましたが、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、会期中で終了しました。

今回の企画展示では、浮世絵や絵馬、古絵図などの資料をもとに、これらを描き、必要とした人びとの暮らしを表現しました。この記事で一部を紹介いたします。

平和が続いた江戸時代、人びとは「村」を基礎として暮らしていました。



▲「舎人新村古図」(寄託資料)

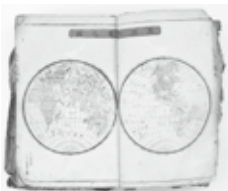
先人たちは、村の自治を営む中で、たくさんの古文書を残しています。その中には絵図が含まれ、村の来歴を具体的に知る貴重な資料となっています。

「舎人新村古図」には、水田とともに水路が詳しく描かれており、沼地の水を治めて水田として拓いた村の歴史を伝えています。

江戸時代も中期になると、人びとは社寺参詣の旅を楽しみ、そのまなざしは村を超えて日本各地へと向けられていきました。

桶川宿の伊勢屋茂右衛門は、麦や紅花を商う豊かな商人で、旅を好んでいたそうです。茂右衛門は、弘化3年(1846)に伊勢皇大神宮、金毘羅社、善光寺をめぐる旅に出かけ、道中の出来事や名所旧跡の有様を日記に記しています。

当時の人びとは旅をとおして国の姿を知り、その好奇心は世界にまで広がっていきました。幕末にあたる文久3年(1863)に刊行された『江戸大節用海内蔵』には、世界に開かれた横浜の開港場や世界の図までも収録されています。



▲『江戸大節用海内蔵』

幕末の開国から明治維新を経て、明治政府は、軍事や税制といった国の制度を整えていく中で、近代国家の設計図として地図を作成していきます。



▲「地租改正地引絵図」(桶川宿東半部)

明治11年(1878)に桶川宿戸長役場が作成した「地租改正地引絵図」は、60分の1縮尺の大きな測量図です。これは、国家が国税の基礎となる地租を課すため、国民が所有する土地を確定するために作られました。平和な江戸時代に旺盛な知的好奇心をもとに学んだ桶川の先人たちは、明治に至り、自らの土地の測量をとおして近代国家の建設に参加していたのです。

一方、中山道桶川宿以来の旅館業を営んでいた武村徳松さんは、明治から昭和へと移り変わる暮らしの中で、水彩画を描いていました。江戸時代の絵師が求めに応じて描いた絵図と異なり、徳松さんのまなざしをとおして描かれた桶川の水彩画は、近代を生きた個人の心象風景を表現したものでした。



▲武村徳松画「浅間横丁」(個人蔵)